

生徒の主体性を育む学校づくり

田中 博(本学教職研究科准教授 国際教育・科学教育)

教育観が大きく変わろうとしています。社会の変化に対応するため、教育も変わらなければなりません。かつて、多くの知識を持ち、提示されたマニュアルを確実にこなす力が社会で求められていた時代には、学校教育においても、そのような力を鍛えることが目指されました。過去の日本が、それで成功を収めたことは事実であり、その時代に即した教育が行われていたのだと言えます。現在は、変化の激しい時代となり、学生時代に得た知識でその後の数十年間を社会で活躍できるという以前の教育システムが崩れてしまったと言えます。学んだ知識の多くは10年間も経てば、陳腐な知識となってしまいます。そのような社会で活躍するための資質として、「思考力、判断力、表現力等」が重視されるようになり、今次学習指導要領では、「学びに向かう力・人間性等」が必要な資質・能力とされ、そこでは、主体性が注目されるようになったわけです。

私自身は長年、立命館学園の附属校である立命館中学校・高等学校で教員をしてきました。その中では、主体性を大切にしたい取組が重視されてきました。最も象徴的な取組は、「学内協議会」です。月に1回、定例で開催されるこの会議は、生徒会執行部と学校執行部との会議です。学校行事や学校での生活に関わる様々な議題を生徒会が提案し、議論を行います。ここでの議論は、生徒も教員も対等の立場で行うことが前提で、生徒側の主張が曖昧であれば、徹底的に論破しますし、逆に、生徒が教員の意見を覆してしまうことも多々あります。このような中で、生徒達の主体性が大きく育まれていくのです。体育祭でもすべて体育委員会が企画・運営にあたります。教員は最低限の安全性の確保だけで、問題が起きても生徒間での解決に委ねられます。始業式、終業式も生徒会の運営で実施されています。私が長年関わってきました Japan Super Science Fair (JSSF) という海外校を30数校招いて毎年開催する科学フェアでも企画段階から

運営まで生徒実行委員会が大きく関わり、その中で、生徒の主体性が高まり、科学者として必要となる非認知能力が獲得されていくことを実感してきました。

日本の教育では生徒の主体性を大切にしたい教育が行われており、中でも立命館高校において、特に充実した取組を行ってきたと自負してきた私自身にとって、驚くべき体験がありました。イギリスで学校見学をさせてもらった時のことでした。ある教室で中学校生徒会と副校長先生の会議が行われていました。校長先生から、それが教員採用試験の生徒面接の打合せであるということを知られました。授業を受ける生徒達が教員を選ぶことに関わることが重要だとお話されました。これを取り入れようとした時に、生徒は単純に面白そうな先生を選ぶのではないかと危惧する意見もあったそうですが、やってみて生徒達の目は確かであることを実感したとおっしゃっていました。選考において、生徒の意見も重視しているとのことでした。もう一つ、同じような経験がありました。オーストラリアの学校で、入学試験において複数回の面接試験を行っている学校の校長先生に、これだけの面接を行うのはたいへんではないですかと質問したところ、試験官に在校生を多く活用していますとの返答でした。自分達の学校を一番よく知っているのは生徒達で、求める生徒像をよく理解してくれているとのことでした。日本の学校でこのようなことが可能でしょうか。しかし、これを考えないと本当の意味での主体性を育む教育は実現しないのではと、考えさせられるきっかけとなりました。

生徒の主体性を育む教育の重要性を今一度吟味してみることが重要だと考えます。その際には、学校教育だけでなく、社会全体での共通認識が必要だと思います。社会が求める人材像は？ここでの主体性とは何なのか？大いに議論をしたいところです。この夏、甲子園の決勝に進んだ2校の監督のどちらかが、選手の自主性を重視されておられたことも印象に残ります。